

工技研 ニュース

関西大学 工業技術研究所 通巻第106号 2001年10月発行

巻頭言



教育という生産現場より

野口 太郎

ここ数年、多くの大学において学生の学力低下が話題となっており、工学部においても、今年から基礎科目を中心に補習授業が開講され、関係する先生方の負担の激増を招いている。原因の一つは、大学側の入学試験の多様化を逆手に取った高等学校側の入試対策優先の教育システムにあるように思われる。ともあれ、一昔前のような、高等学校において修得しているはずの基礎的科目を前提とした講義が成立しなくなっているのが現状のようである。加えて、目的意識や学習意欲に欠ける、あるいは皆無の層の増加が憂慮されている。このような学生の多様化は各学科での専門教育においても深刻な問題となりつつあり、特別研究の選択化も含めた卒業要件の多様化が一部で議論されだしている。

工場に例えれば、これまでは質がある程度揃った原料を加工生産し、製品として出荷して約半世紀、関西大学工学部製品は一定の社会的評価を獲得するまでに成長した。ところが最近、原料の種類やその調達過程が多様化したために、これまでの加工生産システムでは対応できなくなってきたと言うところか。

これまで通りの品質の製品を出荷するためには、生産システムの根本的改善が必要となろう。苦し紛れに内部の検査基準を緩和して出荷製品の品質を低下させることだけは避けたいものである。結果は、関大工学部ブランドへの信用を無くし、買い手がいなくなって、在庫を抱えて倒産という事態を招くだけである。

学生は大学での教育に耐えうる基礎学力と目的意識を持って進学してくるもので、教員は自己の研究を通じて学生の能力を引き出してやればよかった時代は、大学進学率が18歳人口の半分近くに達した現在、遙か昔のものとなったようである。工学部の卒業生として学士（工学）なる学位を授与するに足る水準を修得させるために、新世代の新生生の学力に応じた教育方法はどうあるべきかは真剣に考えねばならない緊急課題となっており、生産現場を担う教員は日々の講義の準備もままならない皮肉な状態に置かれている。

大学は、医学系を除けば、4年で卒業するものとの誤解が社会全体に生じている。所定の単位を修得して学士の学位を得るのに必要な最短期間が4年であり、4年間在学さえすれば卒業が保証されているものではない。この点、学生の側には4年経てば卒業させてくれるとの甘えがあり、教員の側にも4年間で卒業させねばとの強迫観念がありそうである。大学の使命は自ら考えることのできる人材の育成であり、そのための基本的な専門知識の授受にあるわけで、その段階に到達しない学生には時間をかけて修得させるべきであり、学生の多様化に迎合して水準を切り下げて卒業を認定することは大学としての社会的責任を放棄した行為と言わざるを得ない。しかし学習意欲を喪失した学生にとってはありがた迷惑な話であろうから、4年間以上の在学学生には、修得科目に応じて、「学士号の授与」あるいは「単位修得の上退学」といった多様な修了形態を用意しておくのも現実的処置ではないかと考える。